

---

# 欲望者と阻むもの

imaiwa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

欲望者と阻むもの

### 【Zコード】

Z0475F

### 【作者名】

imaiwa

### 【あらすじ】

欲望者、欲望のままに剣を振りかざし、気に入らない奴を抹殺する。それを阻む者がいつか現れるのだろうか。

(前書き)

ダークグローテスト作品です。気が向いたらいつか連載するのかな  
?と疑問符がつく作品です。荒いかと思われます。

俺は武器屋の平凡な夫婦の間に生まれた。

何不自由なく暮らしてたつて言つたら、嘘になるだろ？  
金持ちでもなれば、土地持ちでもない。

そんな夫婦からは最低限のものしか「えられなかつた。

「晩飯は堅いパンが1個あるから食べな

ふん、まあ食えるだけましょ、しかしょ、もつ少しいう暮らしあ  
たいぜ。

ネズミがちよちよ徘徊する俺の自室。

古びた木の床、ギシギシつるさい丸い木の椅子。

ベッドの上には汚れたシーツ、飲み物やら、食べ物をあそいで食  
うから、汚れたまだ。

桶から水を汲み取り、バケツにいれてそれを擦るんだが、ちつと  
も綺麗になりやしねー。

俺の母はそのベッドのシーツを見て、「臭いから捨てたら？」と  
一言蔑んだような目を浮かべて、洗うコツなど教える事もしないで、  
ほつたらかしていく。

ああ、なんで俺はこんな境遇で生まれてきちまつたんだ！

そんな苛立ちを怒気を含みながら体中に鬱積する毎日を、もつど  
れくらい送つてきただろうか？

しかし、そんな糞つたれな生活が終る時が刻々と迫つていた。

俺の部屋に父親が入つてきやがつたんだ。

ただ入つてくるだけなら、こんなことにはなりやしなかつた。

しかし、そいつは、この俺に「家を出でいけ」と生意氣に言つてやがつたんだ。

俺は怒りのまま父に反論した、いやだと、そんな事言わないで、とかそんな消極的なセリフは吐かねえ。

この言つてやつたんだ。

「ひみせ———。お前殺すぞ?」

「俺を追い出せるものなら死ぬ氣でかかつてこや———。」

そしたら父は、狂つたよつて怒り、椅子を投げつけてきた。

俺の膝小僧にそれが当たると、激痛とともにどこまでもないドス黒い気が体に渦巻き始める。

「お前親ひどいひつ口闇をやがるんだ!」

俺は咄嗟にベッドの横にあつた、長剣をつかみ親父の首元を搔つちつてやつた。

ぶくぶく言しながら、自を噴出し、その場で口めを回して息絶えよつとする親父。

「ははは、やまみり、この糞豚が!」

「あんた!」

母のお出ましだ、地面で無様な死体を晒す父を見て、青ざめた顔をして突つ立つていたが

そのうちその視線が俺に向けられた。

「グラフナーあんたがやつたの？」

「なんてことを」

赤い血糊がついた長剣を手にして、母は体を小刻みに震わせながら、動搖と恐怖が両立する表情で俺に喚き散らす。

「やつだよ、俺がやつたよ、それがどうした？」

「なんてことを？ 警察を呼ばないと…」

母がそういう放った瞬間、後ろから長剣を振りかぶり、縦に振り下ろす。

肉を切る感触とともに、母は背中から鮮血を俺に浴びせかけ、その場で苦悶の表情を残して息絶えた。

「はははは、邪魔者抹殺してやつたぜー！」

「ざまみろーへやつたのがー！」

……

～～～10年後

俺は親と暮らしていたトランス村を離れ、別の地にいた。

一人で地を這つても生きていいく決心をし、なんでもやつた。

この世の全てを切り裂くために、暗黒魔道の師について10年間血の滲むような努力？ いんや違う！ ただ、強さを求めた。我が欲望を阻む全てのものを打ち滅ぼし、そのドス黒い欲望を必ず満たすために、強くなりたかった。そして強くなつた。

「お前は十分強い」

「そのドス黒い欲望かなえて周りなさい」

「はい、師匠、そうします」

「こんな俺が、なぜ10年間も暗黒魔道の師とは言え、他人に教わることが続けられたのか？」

それはこの師ファウストが、俺と似たような境遇で、しかも同じように親殺しを決行し、

その後、人里離れた山奥で仙人のように暮らし、そこで腕を磨き、暗黒魔道を自力で編み出した男であるからかもしれない。

それに何より、こいつは上から物を言わないし、押し付けがましい事を言つた事がない。

常に俺の意見を流し、尊重し、否定をしない。

そんな彼と抗う展開になるはずがなかつた。

師匠に挨拶を終え、下山した俺は、馬鹿みたいに広い草原にでた。行く当てもない。食料も僅か。水ももう残り少ない。途方にくれようものなら、一日だって生きていけない、そんな場

所で俺は待っていた。

虫の這つ姫が繁殖した倒木に尻を置いて、辺りを魔法で強化した視力をもって、どんなものも見逃さないよつこ、息を凝らして、獲物を探す。

「馬車だ」

ガキ二人、しょぼくれたおつさん、そいつの奥さん。目に入った奴等の顔はそうだな、旅行気分でどこかへいく途中つてどこか。

幸せそうな顔してやがる。

だが、これからお前たちがその田でみるのは地獄の一丁目だぜ。

黒い外套を引っつかみ、上に羽織った俺は、馬車の進路を計算し先回りして、奴等がくるのを茂みの中でじつと待つ。息を凝らし気配をたつた俺は、いわば獣。どんな者にも気づかれる事はないだろつ。

氣づいた時には相手は死んでいる。

「母さん、町まだ〜？」

「はこはこ、もつすべよ、中に入つていなさい」

「最近このへんは野党が出るつて言つから」

「ははは、父さんがいりや大丈夫や」

「父さん頼もしい」

「ハハハハハ」

女のガキ、坊主、父、母、位置も、武器の有無も確認した。  
武器は父親が隣に置いている猟銃のみ。

わけないな。

殺すぞ。

俺は馬車の進路沿いにある、高い木の上に移動することにした。  
猿が這つようすらり上る。木登りは暗黒魔道の使い手なら誰  
でも出来る。

暗黒魔道即ち、暗殺を生業とする者が使う魔道。木登りは必須だ。  
理由はしらんがな。

3秒だ

木の下を馬車が通りがかつた時、その車体の上に飛び乗つた。  
屋根の上から身を乗り出し、親父の喉をタガेで掻き切る……1  
それを見て仰天した母親に声をあげる間も与えず、タガेを持ち  
かえ、胸に突き刺す……0・5。

終わりだ、ミッションは終つた。

3秒は多すぎたか、ガキは数のうちに入らん。

父親と母親の死体を馬車から地に蹴り飛ばすと、馬の手綱を握り  
席に腰掛ける。

後方からガキのピーピー泣き喚く声が聞こえるが、気にしない。  
後で殺すか、野に捨てるかだからな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0475f/>

---

欲望者と阻むもの

2010年12月17日02時38分発行